

現代イタリア・市壁との共生：ルッカ、チッタデッラ、ボローニヤの事例から

大黒 俊二

Citation	歴史遺産と都市文化創造 III: 都市城壁(惣構)を町づくりにいかす. pp.63-92
Issue Date	2006-03
Type	Research paper
Textversion	Publisher
Rights	For personal use only. No other uses without permission.
doi	10.24544/ocu.20191223-001

Placed on: Osaka City University

大阪市立大学大学院文学研究科
21世紀COEプログラム

「都市文化創造のための人文科学的研究」

歴史遺産と都市文化創造 Ⅲ

——都市城壁（惣構）を町づくりにいかす——



2006年3月

大阪市立大学大学院文学研究科
都市文化研究センター

[調査研究報告4]

現代イタリア・市壁との共生 —— ルッカ、チッタデッラ、ボローニヤの事例から ——

大黒 俊二

(西洋史, 大阪市立大学大学院文学研究科)

(COE 事業推進協力者)

1. はじめに

今回のシンポジウムを企画した仁木宏氏から依頼されたのは、市壁保存の先進国であるイタリアの事例を調査して報告することであった。そこで今秋イタリアの特徴的な市壁を3つばかり駆け足で見て回った。その際意外に思ったのは、たしかにイタリアは仁木氏のいうとおり市壁保存の「先進国」であるが、その「先進」性に独特の深みとかげりがあるように思われたことである。イタリアでは市民と市壁との付き合いは長く、保存の技術も経験も豊かである。しかし市民と市壁との関わりには、保存と活用の「先進性」という言葉では尽くせない複雑な面があるように思われた。この点は最後に「屈折した共生」という言葉で説明してみたい。まずは今回の調査地の概要にふれておこう。

今回調査対象としたのはルッカ Lucca、チッタデッラ Cittadella、ボローニヤ Bologna の3都市である。ルッカはトスカーナ西部の都市、中世のコムーネ（自治都市）体制を18世紀まで維持した数少ない都市である。チッタデッラはヴェネツィア北西部の小都市で現在でも人口2千人、13世紀初めに新たに建設された都市である。ボローニヤはイタリア半島付け根の中央部にあり、世界最古の大学の所在地として知られている。

それぞれの市壁をざっと見てみよう。ルッカとチッタデッラの市壁は今もみごとに保存

されている【写真 L01、図 1、写真 C01】が、ボローニャの市壁は一部しか残存していない【写真 B01、B02】。ルッカの場合、壁の厚さ、そしてところどころスペード型に突出している部分に注意していただきたい。チッタデッラでは壁の高さに注目してほしい。この点は後でまたふれる。

イタリアには現存する市壁が無数にある。そのなかでなぜこの3都市を選んだか。その理由はこの3都市がさまざまな意味で対照的な性格をもっているからである。第一に市壁の構造である。チッタデッラとボローニャの市壁は薄くて高いが、ルッカのそれは肉厚で低い。これは中世と近世の違いである。中世では櫓を組んだ攻城戦に備えるため市壁には高さが求められたが、近世になると新たに出現した大砲の砲撃に耐えるため厚い壁が必要になった。すなわちチッタデッラとボローニャは中世の市壁、ルッカは近世の市壁の代表なのである。第二に、ルッカとボローニャはローマ都市として出発し、時間をかけてゆっくり成長してきたのに対し、チッタデッラは13世紀初頭、短期間の間に計画的に建設された。つまり両者は自然成長都市と建設都市という点で対照的であり、この違いは今も街路網や市壁平面図にみてとることができる。第三に、上述のようにルッカとチッタデッラは今日まで市壁を保存してきたのに対し、ボローニャは20世紀初頭に取り壊した。すなわち市壁を残した町と壊した町という点で両者は対照的である。

この3都市を選んだのは、こうしたさまざまな対照性からイタリア市壁の特徴を浮かび上がらせることができると考えたからである。以下、それぞれの市壁を過去と現在に分けて紹介し、最後に市壁保存「先進国」イタリアの与えてくれる示唆と教訓にふれてみたい。

2. 過 去

1. ルッカ

ルッカから始めよう。ルッカには3つの市壁（跡）がある。【図 1】の都市プランを見ると左下方にはほぼ長方形の区画があり、その内部は道路が直交している。ここがローマ時代の市街地であり周囲は壁で囲まれていた（古代の市壁）。全体が方形で道路が規則正しく直交するパターン（グリッドパターン）がローマ都市の特徴である。中世になるとローマ市壁を越えて右側（東側）上方（北側）に市街が拡大する。これを覆って第二の市壁（中世

の市壁)が建設される。その後さらに市街地が拡大したため、16-17世紀に第三の市壁(近世の市壁)が建設された。つまりルッカは古代、中世、近世の3つの市壁に囲まれていたことになる。今日では古代の市壁は道路となっており、中世の市壁も一部しか残っていない。完全に残っているのは近世の市壁であり、イタリア全土にその名を知られているルッカの市壁といえはこの近世の市壁をさす。以下で注目したいのもこの近世の市壁である。

この市壁は1544年から100年近い年月をかけて作られた。小規模ながら独立都市国家であったルッカが、近隣のトスカーナ大公国からの攻撃を想定して建造したものである。

【写真 L01】からわかるように比高はそれほど高くなく、7~8メートルくらいである。そのかわり幅はかなり広い。【写真 L02】のように平均で15メートル程度、広いところだと20メートル以上ある。市壁の上は両側に並木があり中央に道路が走っている。20年前までは車道であったが現在は歩行者と自転車の専用になっている。これをチッタデッラの壁上通路【写真 C02】と比べてみると中世と近世の違いがよくわかる。チッタデッラの場合、壁上の歩道は幅0.5メートル程度しかなく、柵がなければ危なくて歩けないほどである。ルッカ市壁の厚さはこれが大砲時代の産物であることを物語っている。

この市壁は厚さ以外にも近世の特徴をよくとどめている。第一は先にもふれたスペード状の突出物で、バルアルド baluardo ないしバスティオン bastion と呼ばれ、堡壘と訳される。ルッカの市壁には10の堡壘が突き出ている。堡壘はこれも砲撃に備えた施設で、この形に造ると敵を迎え撃つ際に死角が最小になるそうだ。堡壘の形は都市によりスペード型、三角形、ひし形などさまざまだが、堡壘のある市壁を見れば近世のものと思ってまず間違いはない。堡壘を内側から見たのが【写真 L03】である。【写真 L02】と合わせて見ると、市壁の外側だけが煉瓦でできていて内側は土を盛っているのがわかる。厚い市壁といっても大部分は土でできていることになる。当時の砲弾は中に火薬が入っていない鉄や石の塊であるから、市壁を飛び越えて家の屋根に当たっても穴が開く程度で済む。それよりも市壁を破壊されるのが都市にとって致命的だから、市壁は高さよりも幅を広く取って頑丈に造ることになるのである。

もう一点、ルッカそして近世の市壁に特徴的なのは市壁の外に広がる空き地【写真 L01、L10、図 1】である。ルッカの場合、今は草地になっているがかつては堀であった。水をためて敵の接近を阻むと同時に砲弾の飛距離に対抗する意図があった。この堀を terrati という。ここでは現状に即して「空堀」と訳しておきたい。イタリアに限らず堡壘と空堀を

備えた分厚い壁というのが西欧近世の市壁の特徴である。そうした市壁の姿は日本でも函館の五稜郭に見ることができる。

ルッカの市壁は近世市壁の典型であると同時に、ここにしかない独自の建造物をもっている。それは各堡壘の付け根の部分にある小さな建物である。casermetta と呼ばれ、ルッカ独特のものだそう。かつては武器庫や詰所に使われていた。casermetta は語形から推して casa (家) に由来すると考えられるが、ここでは一応「小兵舎」と訳しておくことにする。10 の堡壘に付属する 10 の小兵舎は大きさも形もまちまちで個性があり【写真 L04、L07、L09】、丁寧に見て歩くと結構面白い。それだけでなくこの小兵舎は、後述するように、今ではルッカ市民にとって市壁活用の重要な拠点となっているのである。

さてこの市壁はトスカーナ大公国を仮想敵国としたものであったが、実戦で都市を守ることは一度もなく 19 世紀を迎える。19 世紀にはもはやこの形態の市壁は時代遅れになっていた。1815 年にルッカは、ナポレオン支配の動乱を経てブルボン家の支配下に入る。ルッカにやってきたブルボン家の支配者マリア・ルイーザは、軍事的意義を失った市壁の公園化を意図し、建築家ロレンツォ・ノットリーニ Lorenzo Nottolini の助けを借りて壁上に遊歩道を整備し、その両側に並木を植えた。市民生活に溶け込んだ公園という現在の市壁景観はこのときに始まる。こうして市壁がルッカ市民の憩いの場となってすでに 200 年を経ている点に注意しておこう。

この後ルッカの市壁に厄介な問題が生じる。小国に分裂していたイタリアは 1861 年に統一され、ルッカもイタリア王国の一部となった。統一を機に市壁は国家所有とされ市民の手を離れたのである。しかし市民はただちに買戻しの運動を開始し、1870 年に市壁は再びコムーネ（この場合のコムーネは日本の市町村にあたる地方自治体）の手に戻った。こうしてコムーネは所有権を取り戻すことで市壁の保存と活用の主体となり現在にいたっている。先ほどの中村武生氏の話にもあったように、所有権問題は市壁を保存・活用していく上で大きなネックとなるが、ルッカの場合、この問題は 100 年以上前に解決されていたのである。

2. チッタデッラ

チッタデッラは 1220 年に建設された都市である。計画的に建設されたことは、【図 2】のように中心部で直交する大通り、円形の市壁、グリッドパターンの街路網から容易に推

察できる。南北の大通りが今も VIA ROMA と呼ばれているように、この町は元来ローマ道が直交するところを選んで建設された。ローマ道が都市プランの骨格として利用されたのである。

この町は近くのパドヴァ Padova 市の防衛拠点として建設されたものである。13 世紀当時、北イタリアは独立した都市国家（コムーネ）が乱立して相互に激しく争っていた。パドヴァもそうしたコムーネの一つで、隣の有力コムーネたるトレヴィーゾ Treviso としのぎを削っていた。チッタデッラはトレヴィーゾの攻撃に対抗するための防衛拠点として建設されたのである。チッタデッラ Cittadella という名前そのものがこの町の性格を端的に物語っている。cittadella とはイタリア語の普通名詞で「要塞」、「砦」という意味である。他方のトレヴィーゾも、同じような防衛拠点カステルフランコ・ヴェネト Castelfranco Veneto を築いてパドヴァに対抗した。カステルフランコ・ヴェネトも、チッタデッラより規模は小さいが中世の市壁をきれいに保存している。

しかしパドヴァもトレヴィーゾもこの後、ヴェネツィアというさらに強大なコムーネに呑み込まれてしまう。それにともないチッタデッラも 1405 年以後はヴェネツィア共和国の支配下に入り、この状態は 1797 年ヴェネツィアがナポレオンの侵入で滅亡するまで続く。ヴェネツィア支配下の 16 世紀初頭、チッタデッラは中世市壁の終わりを象徴する事件に遭遇した。1509 年、カンブレー同盟戦争（ヴェネツィアが教皇、フランス、神聖ローマ帝国など有力国家を相手に戦った戦争）中にこの町が砲撃されたとき、薄くて高い中世の市壁は簡単に崩壊してしまったのである。崩壊の跡は現在もそのまま残っている【写真 C03】。この後チッタデッラは崩壊部を修復することはなく、ルッカのような砲撃に耐える市壁を造ることもせず、ボローニャのように無用の長物となった市壁を取り壊すこともしなかった。16 世紀以後のチッタデッラの市壁は、ひとことでいえば放置と無関心の対象であった。多少目につく出来事といえば 1930 年代、ある市民が自分の家を修復するために市壁の煉瓦を取り去ったことくらいである。【写真 C07】は煉瓦が取り去られた跡である。当時この行為を非難する者は誰もいなかったという。このこと自体放置と無関心の証拠であろう。チッタデッラ市民が市壁の存在に目覚めるのは、後述するように 1980 年代のことである。

3. ボローニャ

ボローニャの市壁のあり方はルッカと似たところがある。**【図 3】**に見られるように、中心に方形・グリッドパターンのローマ都市があり市壁で囲まれていた。ついで中世に2度、市街地の拡大とともに市壁が建設された。古代以来の三重の市壁に囲まれていた点はルッカと共通する。ローマ時代の市壁はこれもルッカ同様今はなく、街路網に面影を残すのみである。中世の第一市壁は、第二市壁の建設とともに壊され現在は一部のみ残存している。中世の第二市壁は 20 世紀初頭コムーネによって取り壊された。しかしこの取り壊しは全面的なものではなく、現在も 1 割程度が残存している。

ボローニャはルッカと違い近世の市壁をもたなかった。また無用となった市壁を放置せず意図的に壊した点でチッタデッラと異なる。この意図的な破壊、また破壊の仕方に市民と市壁の微妙な関係が表れており、現代における市壁の保存と活用にとって興味深い示唆を与えてくれると思われる。この点は最後にふれることにする。

3. 現 在

1. ルッカ

それでは現在、市壁はイタリアの市民生活にどのように生きているのであろうか。

ここでもルッカからみていくことにする。ルッカの市壁の特徴は、上述のとおりその厚さ、小兵舎、空堀であった。この3つの特徴がそれぞれ市民生活にたくみに生かされている。厚い壁の上にはすでに 19 世紀初め以来遊歩道ができ、両側に街路樹が植えられて心地よい散策路となっている**【写真 L02】**。また一周 4.2 キロメートルのこの遊歩道はサイクリングやジョギングに格好のコースでもある。堡塁部分は小さな公園ほどの広さがあり、さまざまなイベント会場として利用されている。有名なのは植木市で、市内にある植物園の協力を得て開かれ、全国的によく知られている。

空堀は一面よく手入れされた草地である。私が訪れたとき、たまたま独特の草刈機で草を刈っていたが**【写真 L11】**、それをみてもこの広大な草地を維持するのが容易でないことが想像できた。この空堀は年に数回ゴルフのコンペに利用されるくらいで、具体的な用途より緑地としての意義が重要視されているようである。利用が多彩なのは小兵舎で、私が

見て回った範囲でも児童図書館、展示場【写真 L08】、レストラン【写真 L06、L07】、アーチェリー・クラブの詰所と練習場【写真 L09】などに利用されていた。

小兵舎の一つは市壁管理事務所 Opera delle mura【写真 L04】となっている。上述のとおり 1870 年以来ルッカの市壁はコムーネの所有となり、市壁の管理と活用、イベントの企画などはこの管理事務所が中心になって行っている。職員は 12 名、3 名が事務職で 9 名が現業、全員コムーネの職員である。【写真 L05】は管理事務所の内部であり、ここで現在の市壁管理について多くの情報を得ることができた。

2. チッタデッラ

ルッカでは市壁そのものが——厚い壁、空堀、小兵舎のように——市民生活への利用に好都合な物理的条件を備えていた。これと対照的なのがチッタデッラである。薄くて高い市壁では市民生活に生かす余地はあまりない。そのため現在チッタデッラ市当局はこの市壁を修復して観光資源として売り出そうとしている。チッタデッラの市壁を初めて見る者はその偉容に圧倒される。壁というものがもつ存在感と重量感をこれほど感じさせるものは多くない。これはたしかに観光資源になりそうである。さらに近年チッタデッラの市壁は世界遺産に指定され観光地化が勢いづいている。

市壁修復は大きく 3 つの面で進められている。第一は市壁そのものの修復である。1980 年代後半から始まり、【図 4】のように市壁を 4 分の 1 ずつの区画に分けて修復している。現在、図の左（西）半分の修復が終わって右下（南東）部分が修復中【写真 C04】である。あと数年ですべての修復が終わる予定という。修復前と後では、【写真 C05】と【写真 C01】を見比べてみれば違いは歴然としている。未修復の部分が色あせて崩れかけ、草などが絡みついているのに対し、修復後の部分は薄いピンク色に輝いて壮麗である。

第二は市壁上の周遊路である。先に【写真 C02】でみたようにチッタデッラの市壁上にも狭いが通路があり一周できるようになっている。もともと攻城戦に備えて作られたものであるから一定間隔ごとに塔や矢狭間があり、人一人がやっと通れるほどの幅しかない。おまけに内側は柵もなくそのまま絶壁になっている。現在、この通路を整備し柵をつけて市壁を一周できるようにする作業が進んでいる。この周遊路もすでに西半分が完成しており、私も実際に歩いてみた。歩いてみると市壁内外の眺望を楽しむことができるばかりか、市壁の構造や中世の攻城戦のようすも伺い知ることができて興味深い。カンブレー同盟戦

争時に砲撃で破壊された部分はそのまま残されており、ここは空中の通路でつないである【写真 C03】。空中 15 メートルのこの渡り道を通るときはちょっとしたスリルがある。

第三は市壁の外堀の整備である。チッタデッラにも、ルッカほど大きくはないが外堀があり市壁を囲んでいる。この外堀の整備は 2002 年に終了した。ここで注目すべきは堀の水際である。【写真 C03】の下部をよく見ていただきたい。縦に打ち込まれた丸太が並んでいるのがわかると思う。なんの変哲もない光景に見えるがここにはヴェネツィアの伝統工法が生かされている。ラグーナ（砂洲）上に築かれたヴェネツィアでは、砂という脆弱な地盤上で建物の沈下を防ぐため、大量の木杭を打ち込んでその上に家を建てた。水中に打ち込まれた木杭は腐敗せず長年もちこたえる（水中の木簡が長持ちするのと同じ理由である）。この工法をチッタデッラは堀の整備に利用したのである。伝統工法の知恵を現代に生かした好例といえよう。

あと二つチッタデッラで興味深く思われたことを述べておこう。一つは劇場と市壁との関係である。数年前、市内にモダンな野外劇場が完成した。【写真 C06】でわかるように市壁上の通路は、ある場所でこの劇場の舞台正面に達する。ここは高さといい角度といい観劇に絶好の場所である。関係者に確認するのを忘れたが、おそらくこれは偶然の一致ではなく、当初から市壁上の観劇を予定して劇場を設計したものと思われる。市壁にはこうした用途もあると感心させられた例である。

第二は市壁修復の財政である。上述のように市壁は4分の1ずつの区画に分けて修復されている。修復担当技術者の話では、1 区画分の修復費の目途が立つごとに修復を行ってきたという。財源はコムーネはもちろん、県 *provincia*、州 *regione*、国、EU、各種のコンペや補助金などあらゆるところからかき集めてくるという。驚いたのはそのなかに失業対策事業費まで含まれていたことである。市壁修復は一面では失業対策でもあり、職がなく人口流出に悩む地方の小都市にとって有効な方策であると痛感した。

市壁の現在はルッカとチッタデッラで対照的である。ルッカの市民はすでに 200 年間さまざまな仕方で市壁とともに生きてきた。これに対しチッタデッラは市壁を長く放置した後、20 世紀の末ようやくその観光価値に気づき修復と売り出しに懸命になっている。両者の違いは歴史的背景に由来するとともに、市壁の物理的形態に起因することも否定できない。チッタデッラの場合、上述の劇場観覧席のような例を除けば市壁を市民生活に生かすのはむずかしいと思われる。とはいえ観光資源として町おこしに生かすのも、市民が市壁

と共生していく一つの道であることに変わりはない。

3. ボローニャ

ルッカとチッタデッラは市壁と共存していく道を選んだ。これに対しボローニャは 20 世紀初頭市壁と決別した。これはボローニャに限らず中規模以上の都市の多くが選択した道であった。それらの都市では 19 世紀以来近代化が進むにつれ、市壁は発展の妨げとなる過去の遺物とみなされ破壊されたのである。ボローニャはどのようにして決別への道を歩んだのであろうか。

破壊を求める声はすでに 1878 年からあがっていた。コムーネ議員の一人が、市壁は発展の邪魔になる「拘束服」にすぎず、他方で歴史的・建築的価値もなく全面的に破壊すべきだと主張したのである。1889 年にコムーネが採択した「ボローニャ規制一般計画」でも、将来における市壁の取り壊しが予定されている。世論もおおむね破壊に積極的であった。したがって 1902 年に最初の鶴嘴が市壁に振り下ろされたとき【写真 B04】、市民たちはこれを自然な結果と受け止め新聞も小さく報道しただけであった。市壁は 1902 年から 1904 年にかけてほぼ 9 割が破壊された。しかし 13 あった市門の多くは残された。したがって破壊は完全なものではなかった。ここにボローニャ市民の市壁に対する微妙な意識をみてとることができるが、この点は後でふれる。

破壊を支持する理由は多様であった。第一は交通の便である。20 世紀初頭のイタリアにはすでに自動車が出現し路面電車が走っていた。交通手段が変化し、交通量が急速に増加するなかで市壁は最大の障害となっていたのである。第二は衛生上の理由である。当時市壁は空気の流れを妨げ、伝染病の原因となる悪い空気を醸成すると考えられていた。市壁を取り去って風通しをよくすることは健康上の理由からも求められたのである。第三は税金問題である。市壁に設けられた門は、ボローニャに限らず、中世以来入市税（間接税）徴収の場であった。この税は市門とともに 20 世紀初頭も残っており、市民にとって市門とは忌むべき入市税徴収の場として意識されていた。「都市の壁」＝「税の壁」の撤去を求める声は民衆の間に根強くあった。第四は失業対策である。ボローニャは 19 世紀末以来イタリアでも労働運動の盛んな地であり、農村部から職を求めて集まる人々を各種の団体が組織していた。そこでコムーネ当局にとり市壁の取り壊しは、労働者に仕事を与えて不満を抑え、労働運動の激化を防ぐ手っ取り早い手段と考えられたのである。

こうして世論の大勢は取り壊しに傾いていた。当時のそうした意見を代表するのは「進歩の名のもとに」*In nome del progresso* というスローガンである。都市が新しい世紀に発展していくためには、古い衣を脱ぎ捨てなければならないと叫ばれた。市壁は守るべき *antico* な（古くて良い、古風な）遺産ではなく、*vecchio* な（古くて悪い、古臭い）遺物とみなされた。とはいえ、市壁の破壊を「蛮行」、「文化の破壊」として激しく非難する声も少数ながらあった。その代表は建築家・文学者で中世マニアのアルフォンソ・ルッビアーニ *Alfonso Rubbiani* である。彼は破壊を食い止めるために論陣を張り、各方面に働きかけたがほとんど効果がなかった。彼の主張が見直されるのは 100 年後のことである。

その 100 年後、すなわち 2002 年、ボローニャで市壁破壊百周年を記念するシンポジウムが開かれた。ボローニャ市が主催し「失われた境界」*I confini perduti* と題されたこのシンポジウムでは、イタリアのみならず他のヨーロッパ諸国、さらに非西欧世界からも研究者を招いて市壁の破壊と保存の意味について議論が交わされた。ボローニャ市壁の破壊百周年を機に、現代都市にとって市壁がもつ意味をあらゆる角度から見直そうとする試みである。その記録は 500 ページを超える大冊である。冒頭で主催者の一人は 100 年前の破壊を「文化に対する犯罪」、「虐殺」と呼び、今日なら破壊に賛成するものは誰もいないだろうと述べている。「進歩の名のもとに」破壊を推進した 100 年前とくらべて明らかに意識は変わったのである。また同年、写真に残るかつての市壁とその破壊風景を集めた書物が出版された。それは意味深長にも『進歩の名のもとに』と題されている。この 100 年でなにが変わったのであろうか、なぜ変わったのであろうか。最後にこの点にふれておくことにしよう。

4. 教 訓

以上の例からみても、仁木氏のいうとおり、イタリアが市壁保存の先進国であることはたしかである。イタリアは保存の技術、市民生活への活用、観光開発などの面で豊かな経験を有しており、その経験には我々が学びうるところが多い。しかし今回の調査で印象的だったのは、そうした個々の教訓の背後に、市民が市壁と取り結ぶ独特の関係や市壁への複雑な思いが見え隠れする点である。私見ではイタリアが「先進国」であるのはまさにこ

の点にあると思う。それを「傷つきやすさ」と「屈折した共生」という表現で説明してみたい。

今回、歴史の風雪を生き抜いてきた市壁を見て痛感したのは、市壁が意外に弱く傷つきやすい存在であるという事実である。どの市壁もみかけは頑丈で力強い。またそうでなければ防壁として用をなさない。しかし壊れやすく壊されやすいのも事実である。チッタデッラの中世の市壁は大砲の出現で簡単に壊された。その後は市民の無関心で朽ちるま became なった。ボローニャの市壁は市民の決断で意識的に破壊された。ルッカにしても近世市壁の建設で用済みとなった古代と中世の市壁は取り壊された。市壁は物理的にも社会的にも弱い存在なのである。同じ歴史的建造物でも教会や修道院、市庁舎ならこれほど粗末に扱われることはありえない。これはまず防衛という実用的価値が優先される市壁の運命なのかもしれない。

とはいえ市壁はたんなる防衛のための施設でないのも事実である。18世紀初めに描かれたルッカ都市図をみてみよう【写真L12】。市壁が堡壘や空堀とともに描かれている。市壁の姿は市内の町並み以上に印象的である。16世紀以後数多く描かれたこの種の都市図には、必ずといってよいほど市壁が——リアルに、綿密に——描き込まれており、都市の第一の相貌となっている。遠望したとき都市はまず市壁として意識されるのである。もう一つボローニャの守護聖人たる聖ペトロニオ San Petronio の像（ミケランジェロ作）をみてみよう【写真B05】。彼は両手にボローニャの町を支えもっている。そのボローニャは市壁で囲まれている。すなわち都市を守る市壁は聖人による守護と重ね合わされているのである。ルッカのような都市図も聖ペトロニオのような守護聖人像もとくに珍しいものではなく、他にも多く例がある。これらからわかるのは、市壁はたんなる防衛施設ではなく、都市のシンボルでもあり市民のアイデンティティの一部をなしているということである。

そうした市壁をボローニャは「進歩の名のもとに」破壊した。その破壊には当初からルッピアーニのように強硬な反対意見があった。100年後、ボローニャ市民は破壊が誤りであったことを認めた。破壊の是非をめぐる議論には、市民が市壁によせる複雑な感情が反映されているように思われる。そうした感情がみてとれる例をみてみよう。

現在ボローニャにはかつての市壁の一部があちこちに残っている。長くて100メートル程度、短いところは10メートルくらいしかない。そうした市壁の残骸には必ず【写真B03】のようなプレートが付されている。そこには「都市壁／13・14世紀に建造された最後の市

壁の残存部／20世紀初頭に大部分破壊された／ボローニャ市」と記されている。このプレートは、その形といい色といい銘文といい、市壁にささげられた墓碑銘のようである。今や残骸でしかない市壁に墓碑銘まがいのプレートを付す心情はかなり込み入ったものであろうと察せられる。

もう一つは市門のその後である。上述したように20世紀初頭の破壊においても、市門はその歴史的・建築的価値ゆえに多くが残された。しかし1950年代この市門も破壊の危機にさらされる。破壊を求める理由は再び交通の便であった。本格的な自動車時代の到来にともない、市門は車の流れを妨げ事故の原因ともなっているとして撤去を求める声があったのである。今回もまた賛否両論があり、その結果妥協的な解決が図られた。サン・ヴィターレ門 *Porta San Vitale* をみてみよう。交通の障害として槍玉にあげられたのは、市門前の長く突出した部分 *avancorpo* 【写真 B06】である。サン・ヴィターレ門の場合この突出部のみを撤去することで解決が図られた。ただし撤去後もかつての突出部を白線で残すことが決められた【写真 B07】。しかしこの白線もいつしか消えてしまった【写真 B08】。市壁から切り離され、突出部も失ってぽつんと残されたサン・ヴィターレ門は、【写真 B08】のように周囲の景観とまるでちぐはぐな姿をさらしている。それでもこの門自体を撤去しようという話はない。

このようにボローニャ市壁の破壊のようすをみて感じるのはその手ぬるさ、思い切りの悪さである。なぜ一挙に全部取り去ってしまわないのか。おそらくできないのであろう。ここに市壁に対する市民の複雑な感情を読み取ることができる。市壁というものは、無用ないし邪魔になったからといって簡単にお払い箱にできない実利以上の存在なのである。ボローニャはそうした市壁を「進歩の名のもとに」壊そうとしたがそれに徹することはできなかった。破壊の手を緩めさせたのは、数世紀にわたって市壁と共生し、市壁を都市のシンボルともアイデンティティとも感じてきた経験以外にないであろう。破壊と保存の間を揺れ動くこうした心理をここでは「屈折した共生」と呼んでみたい。イタリア市壁の現状を考える際、破壊と保存の間にボローニャのような中途半端な事例、「屈折した共生」をおいてみることで問題の性格はより明確になるのではないだろうか。

しかし「屈折した共生」はそれなりに成熟した歴史意識を生んだように思われる。ボローニャが市壁破壊100年後、破壊の是非ではなく破壊と保存の意味を考えるためにシンポジウムを催したことがその例である。破壊された市壁は100年後も市民の意識に執拗に尾

を引き続け、破壊の意味を考えるよう促しているのである。

他方でルッカのように市壁との共生に成功したといえる場合でも、ある種の成熟した歴史意識を感じさせられることがある。最後にこの点にふれておくことにしよう。【写真 L10】を見ていただきたい。ルッカの市壁上からの光景である。このように市壁の端には柵も「危険」の立て札もない。市壁のかなりの部分がこうした無防備状態であり、歩いてみるとうっかり足を滑らせそうになる。現に年に一人くらいはここから落ちる人がいるらしい（幸いにも死んだという話はないそうだ）。日本ならすぐに柵や「危険」の立て札を設置するところだろう。そうしないで人が落ちればすぐに行政の責任が問われるだろう。しかしルッカの人々の間では（おそらく）そうした柵や立て札はこの市壁の景観を台無しにするとの暗黙の了解があるのだと思われる。壁から落ちるのは本人の不注意である。そうした人のために市民が誇りとする市壁を傷つける必要はないとの合意があるのであろう。これも一つの成熟した歴史意識ではないだろうか。

参考文献

1. S. Bortolani e Ch. Ceschi (a cura di), *Cittadella. Citta murata*, Cittadella, 2004.
2. T. Costa, *Sulle mura di Bologna. Mille anni di guerra e di pace*, Bologna, 2000.
3. J. Jones, *History of Lucca / Storia di Lucca*, Lucca, 2002.
4. M. Poli (a cura di), *In nome del progresso. 1902-1904: l'abbattimento delle mura di Bologna*, Bologna, 2002.
5. A. Varni (a cura di), *I confini perduti. Le cinte murarie cittadine europee tra storia e conservazione*, Bologna, 2005.

Un ringraziamento particolare ai collaboratori e amici italiani per avermi generosamente fornito informazioni e materiali circa le mura italiane : il sig. L. Zocco Pisana di Opera delle mura di Lucca, la sig.ra K. Sato (佐藤加代子) di Lucca, la sig.na H. Pasini di Ufficio IAT Cittadella, il dott. arch. A. Valentini di Cittadella, la prof.ssa M. G. Muzzarelli dell'Università di Bologna.

大黒報告 図版 (写真)



写真L01

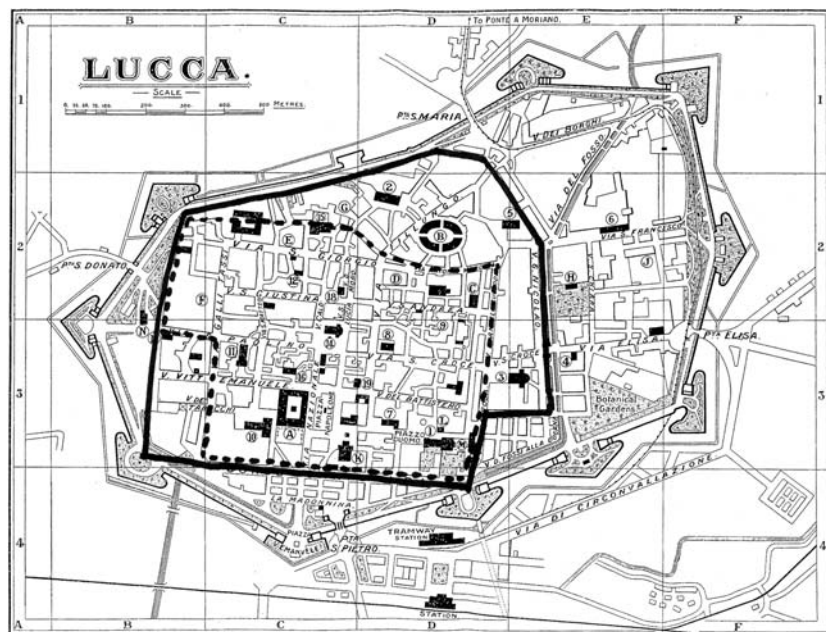


図1 ルッカ都市プラン

- 古代の市壁 (跡)
- 中世の市壁 (跡)

出典：J.Ross and N.Erichsen, *The Story of Lucca*, London, 1912 (reprint, Nendeln-Liechtenstein, 1970), appendix.



写真C01



写真B01



写真B02



写真L02



写真C02



写真L03



写真L10



写真L04



写真L06



写真L07



写真L09

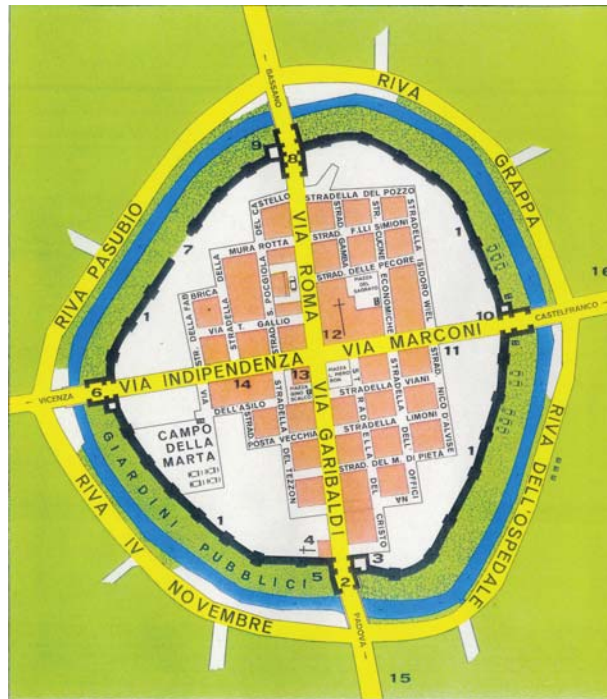


図2 チッタデッラ都市プラン

出典：Cittadella. Guida storico turistica, Cittadella, 1993.



写真C03



写真C07

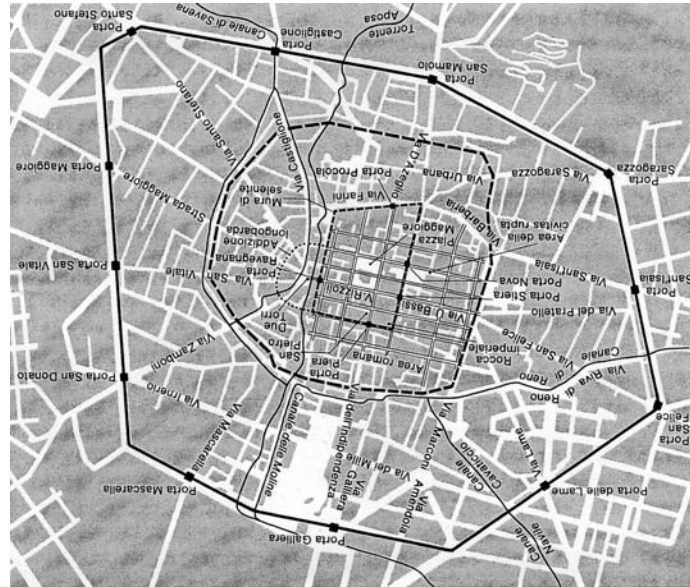


図3 ボローニャ都市プラン

----- 古代の市壁（跡）（6世紀）

..... 中世の第一市壁（跡）（13世紀）

———— 中世の第二市壁（跡）（13-14世紀）

出典：G. Bonazzi, *Bologna nella storia*, Bologna, 1989, p.64



写真L11



写真L08



写真L05

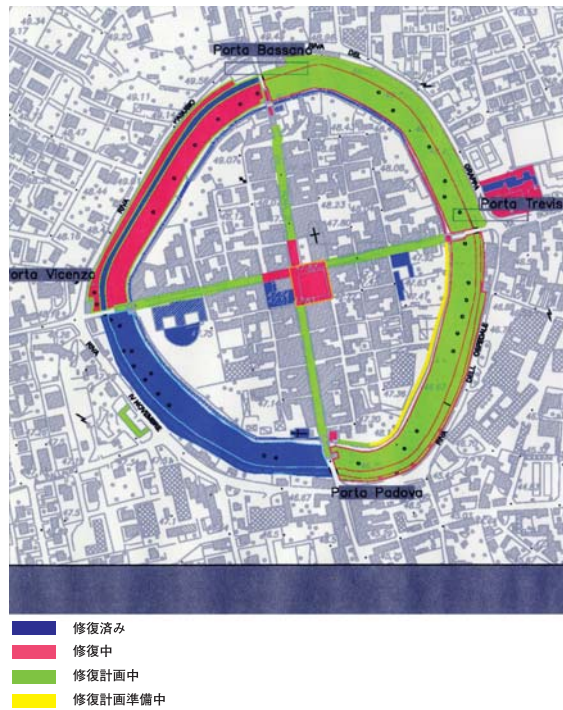


図4 チッタデッラ市壁修復計画

出典：A Valentini, *Restauro e valorizzazione sistema fortificato di Cittadella, Interventi di restauro sul quadrante sud-est da Porta Padova a Porta Treviso*. Bozza, Comune di Cittadella, 2005 (PDF file), p.22.



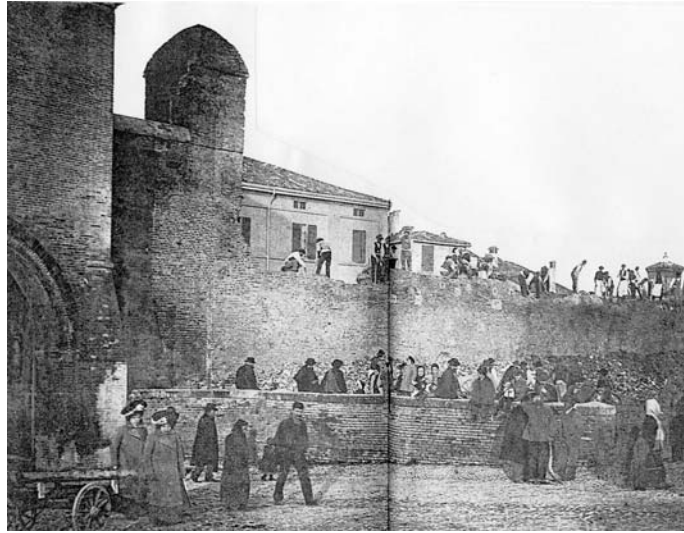
写真C04



写真C05



写真C06



写真B04

出典：T.Costa, *Sulle mura di Bologna. Mille anni di guerra e di pace*, Bologna, 2000, pp. 158-159



写真L12

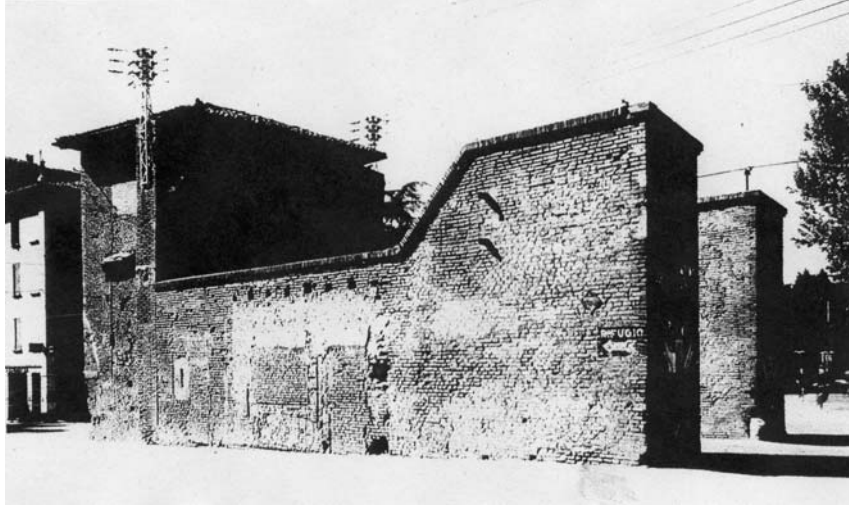
出典：F. Giovannini, *Conoscere Lucca*, Lucca, 1998, pp. 14-15



写真B05 聖ペトロニオ像（ミケランジェロ作）
出典： *Bologna, alma mater studiorum*, Bologna, n. d., p. 77.



写真B03



写真B06 サン・ヴィターレ門（1950年代初頭、突出部撤去前）

出典：M. Poli (a cura di), *In nome del progresso. 1902-1904: l'abbattimento delle mura di Bologna*, Bologna, 2002, p. 36.



写真B07 サン・ヴィターレ門（1950年代初頭、突出部跡を示す白線に注意）

出典：In nome del progresso, p. 38.



写真B08 サン・ヴィターレ門（現在）
出典： *In nome del progresso*, p. 38.